

## 研究プロジェクト

## こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

## ■「負」の感情の制御

「心」と「物」を二元対立的に捉えるのはデカルト以来の近現代の常識化した1つの見方であるが、その見方の是非は差し置くとしても、通常、「物」は目に見えるが、「心」は目に見えないものと考えられている。

だが、ここで、「ワザ」という第三項を置いてみると、対立的に見える両者に橋が架かる。

例えば、こころの未来研究センターのある稲盛財団記念館の西側を流れる鴨川に「橋」を架けたいという「思い・イメージ・プラン」を思いついたとする。そのような「思い」を持つのは「心」のはたらきであり、ある動機や意図や感情や思考に基づいて起こる想像力の発露でもあるが、そのイメージを具体化するために、設計技師を集め、図面を引いたり、力学的に橋桁の太さや強度を計算したり、施工の手順や予算を検討したりして、財源を確認し、建築土木業者に発注して、何年かかけて第二荒神橋を作ることになる。

とすれば、わたしたちはさまざまな「ワザ」（土木建築などの諸技術も含む）を通して、「物」の世界に改変を加え、環境世界や人間世界に大きな変化をもたらしてきたということになる。つまり、広い意味での、人間が用いる「ワザ」こそが、目に見えない心と目に見える物をつなぎ、それらを具体的に表現したり改変したりするソフトウェアであるということになるだろう。

## ■ワザはこころとモノをつなぐ媒介者

本研究プロジェクトでは、あえて、古代日本語に発する「ワザ」という言葉を使いながら研究を進めている。古代日本では神霊を呼び出し、交わり、生命力を高め強化する技法を「ワザワ

ギ」と呼んだ。例えば、『日本書紀』では、「俳優」という漢字を「ワザヲギ」と訓む場合もあれば、「ワザビト」と訓む場合もあり、さらには「伎人」「俳人」「倡人」も「ワザビト」と訓んでいる。いずれにせよ、それらは神楽や舞踊などの古代宗教儀礼に関わる聖なる技法であった。

その「ワザ」は、上記のような諸種の儀礼や芸能から、さまざまな芸術・技術・学芸・ライフスタイルをも包含する。人間はこの「ワザ」の力によって、多様で豊かな文化や文明を形成し、生の充実や社会発展をはかろうとしてきたのである。

こうして、本研究プロジェクトでは、「こころ」に迫る観点として「ワザ」に注目した。「ワザ（技・業・術）」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法であり、その技法には、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かな種類がある。このような「ワザ」に着目することにより、人間の心と、人間が作り上げてきた物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味できる。〈ワザはこころとモノをつなぐ媒介者〉であるというのが、本プロジェクトの基本的視座である。

## ■「手ワザ」領域と「体ワザ」領域

このように、「ワザ」が心と物に相關するソフトウェアであるために、ワザ学研究はこころ観研究やモノ学研究と切り離すことができず、本年度は特にこころ観やモノ学との合同研究会を行った。こころ観の研究プロジェクト報告でも書いた土田真紀氏、大重潤一郎氏などの研究発表はまさに心と「ワザ」の相關に関わる具体事例の発表であった。また、染色家である人間国宝の志

村ふくみ氏による「現代の『工芸』の道」は、柳宗悦が提唱した「民藝」運動から作家として独自の「ワザ」を編み出し、活躍していく過程を率直に表現して大変参考になる。そこに、「民藝」という、「モダン（近代）」を挟み撃ちする志向性を持つプレモダン（前近代）からポストモダン（後近代）を包摂する運動が孕んでいる、もの観・こころ観・わざ観が浮上してくるからである。

「ワザ」は「こころ」と同様に、古語に発し、現在も多様に用いられている広がり多義性を持つ言葉である。柔道では「ワザアリ」という語がそのまま国際判定語になっているが、世界共通語としての「ワザ」の世界を探求し、「ワザ」の本質と意味、またそのヴァリエーション（諸相）を研究することによって、こころと生の豊かさや面白さや楽しさを捉え、それぞれの生活実践に生かし応用することができる。そしてそれが個性と自由を担保したこころ直しと世直しにつながってゆくという志向性のもとで本研究を、まずはモノづくりに関係するような「手ワザ」領域（展覧会「物気色展——物からモノへ」2010年11月21～28日）と、神楽や芸能や呼吸法や瞑想などを含む身心変容技法・ボディワークである「体ワザ」の2つの領域を中心に進めつつある。

## 関連文献

大石高典「身をほぐし、心をほぐす技術と平和力——出産・武術・狩猟を貫く『生存のためのワザ』を構想する」『モノ学・感覚価値研究』第5号、2011年3月。  
奥井遼「憑依と演技の間に——淡路人形座における人形遣いの身体論序説」同上。  
海野直宏「新体道のワザと滝行」同上。  
鎌田東二「滝行——その日本的身体技法の形成と特色についての一考察」同上。